

平成二十三年度

高山市近代文学館調査・研究報告書

平成二十四年三月

社団法人 高山市文化協会

序

平成二十三年度、高山市から委託を受けた「高山市近代文学館調査・研究」については、故中舎高郎氏の著書「飛驒の文学碑遍歴」に著されている俳句・短歌・詩・記述等々の文学碑を、より多くの市民の皆様にご理解いただくことを念頭に、碑文の作者はもとより、碑に刻まれた文学者・国学者・碑を製作した石工等、文学碑の背景に現れる人物・組織についても調査しました。調査の結果は十分ではありませんが、これからも誇り高い郷土の文学について引き続き調査と研究を行い、郷土の文学の振興に尽くしてまいります。今年度実施しました成果を、ここに報告書としてまとめました。

社団法人 高山市文化協会

会長 小鳥 幸 男

目次

第十五回 近代文学館作品展 ―東部地区と旧大野郡編―

平成二十三年九月九日(金)～十一日(日)

一	地図	1
二	香陽(中野直次)句碑	2
三	田中大秀筆の碑	4
四	牧野英一歌碑	6
五	鎌手白映(隆三)歌碑	9
六	大埜間霽江歌碑(三福寺)	11
七	大埜間霽江歌碑(丹生川)	14
八	車田碑	15
九	堀左明翁之碑	17
一〇	富田豊彦歌碑	19
一一	文保(川上哲太郎)歌碑	21
一二	木然(金子大栄)歌碑	23
一三	琴淵万葉歌碑	25
一四	島崎正樹歌碑	27
一五	恵明(新井久左衛門 雨鳩)句碑	29
一六	あゝ野表峠碑(荒垣秀雄書)	31
一七	御母衣ダムの碑	33
一八	莊川桜の碑	34

第十六回 近代文学館作品展 ―西部地区と旧吉城郡編―

平成二十四年二月十日(金)～十二日(日)

一	地図	37
二	宮興寺句碑	38
三	小峯大羽句碑	40
四	早船古よ文学碑	43
五	福田夕咲歌碑	45
六	飛驒山岳会百周年記念碑	48
七	江馬修文学碑	49
八	江夏美好文学碑	51
九	田中澄江文学碑	55
一〇	小鳥幸男句碑	57
一一	瀧井孝作碑	59
一二	井上靖文学碑	62
一三	房成句碑	64
一四	雀集館歌献燈	66
一五	重胤歌献燈	68
一六	名馬大黒之碑(方葉歌碑)	71
一七	小池義清歌碑	71
一八	篠原無然歌碑	74
一九	若山牧水歌碑	77
二〇	田中大秀歌碑	79

一
地
図

第十五回 近代文学館作品展 — 東部地区と旧大野郡編 —

平成二十三年九月九日(金)～十一日(日)

第15回 近代文学館企画展
「郷土の文学碑」
～ 東部地区と旧大野郡編 ～

丹生川町 坊方・北方



丹生川町 小野



高根町



松之本町



朝日町 秋神



上野町



北山界隈



一之宮町



荘川町



日枝神社近く



二 香陽（中野直次）句碑



昭和四十五年（一九七〇）に、若くして亡くなった薬剤師の松本充浩氏を追悼して、勤務先の中野薬品工業（株）が建てたものである。中野直次氏は、号を香陽という。中野薬品工業（株）の創設者。

（桜山大悲閣裏山墓地）

散^{ちじ}りもみち

おしまぬ人^はハ

無^な可^かり

希^け

里^り

香陽

なかのなおじ

【中野直次】

明治三十三年（一九〇〇）一月十七日生、昭和五十九年（一九八四）十月五日没

中野薬品工業(株)代表取締役社長。高山市下一之町の人。愛知薬学校卒。

昭和四年（一九二九）中野天栄堂薬局を開業し十二年（一九三七）中野天栄堂製薬(株)、三十六年（一九六一）中野薬品工業(株)と改組して代表取締役社長に就任（同社は後に大洋薬品工業となる）増血剤「ブル」を開発したほか、何種類もの薬用植物からの成分抽出に成功し特許を取った。岐阜県製薬協会会長など歴任。

著書『よく効く民間薬及び薬用植物栽培法』ほか。日本薬剤師会有功賞（昭和五十五（一九八〇）

【飛驒人物事典】

三 田中大秀筆の碑



大秀の父博道が、桜山八幡神社の神官として在職中に、境内に造庭した。大秀はその由来を文化二年（一八〇五）祝詞にして、その自筆の書を碑にした。

（桜山八幡宮境内、手水鉢左、池の端）

（読み下し文） 訓 読

つぬさはふ五百引石に 三縷りの真綱打ち
掛け さわさわに引き寄せ来て あしひきの
山野の草木を根掘じに掘じて 高山短山と
畳み成して 石走るたぎ落とし 水滞る池
を懸り島を築きて 鯨魚取り青海原と造
成して 花とはしこの桜山の庭の見物と
見む人の心慰さと 寛政と云う年の始めの
ころより 年久に勤しみつつ 享和の二年
と云う年の秋になも ちちの実の父の翁名
は博道 齢七十にして作り意へらえける
故今行先も真木の葉の常とはに栄えつつ
春の花秋の黄葉のいや艶ひに艶ひたきつ
水音の音絶えず 立てる巖の千満代代に動
きながらむ事を 乞ひ禱む余りに 今を古
と偲ばむ 後世の印と その来由を 文化
二年と云う年の長月の望 家継ぎける子

田中大秀誌す

たなかおおひで

【田中大秀】

安永六年（一七七七）八月十五日生、弘化四年（一八四七）九月十六日没

国学者。高山下一之町の薬種商に生まれる。通称は弥兵衛・平之丞。号を紀文。後に大秀と改める。別に八月満・湯津香木園、晩年は荏野翁・荏野老人・三酉。自庭を千種園と呼ぶ。

幼より読書を好み栗田知周、伴蒿蹊らに学ぶ。享和一年（一八〇一）本居宣長の門に入り、没後は本居大平を訪ね国典を研究。飛騨に初めて国学を伝え、多くの門人を擁した。敬神勤皇の念篤く、文政一年（一八一八）に荏名神社、同四年（一八三三）に飛騨総社を再興。歌学、管弦も教授。

大正四年（一九一五）御即位の大典に当たり正五位。著書『竹取翁物語解』『養老美泉弁』『荏野冊子』『土佐日記解』他。

【飛騨人物事典】

四 牧野英一歌碑



昭和二十五年（一九五〇）、牧野英一博士が文化勲章を受章された栄誉たたえ、斐太高等学校創立七十周年を機に、母校の名誉を末永く伝えるものと、同窓会「有斐会」会頭加藤専一氏が昭和四十一年（一九六六）六月一日校内に建立した。

（県立斐太高等学校、校舎玄関脇手前）

英一

かせとほし

五百箇

山々乃

青葉吹

き

天津鞍可

ねの

雪の山吹き

まきのえいいち

【牧野英一】 明治十一年（一八七八）三月二十日生、昭和四十五年（一九七〇）四月十八日没

刑法学者・高山市名誉市民。高山町上向町出身で神奈川県茅ヶ崎市に居住。良三の兄。斐太中学、東京帝国大学法学部卒。法学博士。

東京地裁判事などを経て明治四十（一九〇七）年東大助教授、大正二年（一九一三）教授。この間明治四十三年（一九一〇）からヨーロッパに留学し、近代派刑法学の論理を学んだ。「刑は教育のためである」という教育刑主義で大きな影響を与えた。昭和二十一年（一九四六）貴族院議員となり新憲法の制定に携わった。公職適格審査委員長として公職追放の実施に当たった。佐々木信綱門下の歌人でも評価が高かった。

著書『日本刑法』『刑法研究』ほか。文化勲章（昭和二十五（一九五〇））。初の高山市名誉市民（昭和三十三年（一九五八））。勲一等瑞宝章（昭和四十（一九六五））。従二位（昭和四十五（一九七〇））。

【飛驒人物事典】

【加藤専一】 明治二十七年（一八九四）三月十三日生、昭和五十六年（一九八二）七月二十七日没

開業医・俳人・高山市名誉市民。同市有楽町の人。神岡町の医師多治見泰作の二男で幼時に叔父・加藤規矩男の養子となった。号は蘭亭千歩。斐太中学、千葉医学専門学校卒。

大正八年（一九一九）帰郷し内科医院開業。昭和九（一九三四）～二十三年（一九四八）高山市医師会長を務め、飛驒の風土病研究や地域医療に貢献。二十二年（一九四七）から市消団の初代団長、三十四年（一九五九）市消防長。

雲橋社十五世で、昭和十五年（一九四〇）に加藤家の祖である歩簫の資料を『蘭亭遺稿』として発刊。二十二年（一九四七）の飛騨俳句会結成にも尽力した。高山ライオンズクラブ初代会長、有斐会長、市社会福祉協議会長、高山市社会福祉協議会理事長、調停委員など歴任。

著書『纏の韻』、遺句集『枯尾花』。藍綬褒章（昭和三十九（一九六四））。高山市名誉市民（昭和五十五（一九八〇））。勲五等双光旭日章（昭和五十五（一九八〇））

【飛騨人物事典】

五 鎌手白映 隆三 歌碑



上野町、町内公民館敷地内に、乗鞍岳を見わたすかのように建っている。昭和五十三年（一九七八）二月二日、享年八十四歳で亡くなった白映の遺徳を忍び、飛騨短歌会の協賛を得て、三組の子供夫婦によって建設された。

（上野町公民館敷地内）

のうくらは

天のた可^か山

夕焼て

ただれて

燃えて

空に消えたり

白映

【鎌手白映】かまてはくえい 明治二十八年（一八九五）五月一日生、昭和五十三年（一九七八）二月二日没

歌人。高山市下一之町の人。本名は隆三。斐太中学卒。

家業の洋品雑貨店を営んだ。大正二年（一九一三）の「斐太短歌会」創設メンバー。五年（一九一六）白映が主宰し歌誌『裸形』を発刊。七年（一九一八）には福田夕咲、山田白馬らと「山百合詩社」を発足。昭和四年（一九一九）に『悲陀』、五年（一九二〇）には第二次『裸形』を発刊。また戦後の二十一年（一九四六）に『飛驒短歌』を出し、平成九年（一九九七）の廃刊まで続いた。野口雨情、若山牧水と交友があった。飛驒短歌史に重要な役割を果たし、中心的な指導者。絵や篆刻にも優れ古溪と号した。歌集『夕映』『鎌手白映遺歌集』。

【飛驒人物事典】

【山田白馬】やまだはくば 明治三十五年（一九〇二）十一月十四日生、昭和五十年（一九七五）十一月九日没

民俗学研究者。高山市天性寺町から宮村（一之宮町）へ転居。山田霊林の弟。本名は鎌太郎。失われゆく飛驒の歌謡と民俗を、大正中期から昭和初期にかけて農村各地で採録し『ひだびと』などに発表。昭和十八年（一九四三）発足の郷土芸能研究会の発起人の一人。飛驒短歌会の初期に参加。著書『飛驒民謡物語①②』『屋台ものがたり』

【飛驒人物事典】

【福田夕咲】
ふくだゆうさく

明治十九年（一八八六）三月十二日生、昭和二十三年（一九四八）四月二十六日没

詩人・歌人。高山市大新町一の人。吉郎兵衛（敦雄）の四男。本名は有作。斐太中学、早稲田大学文学部卒。

学生時代から人見東明、相馬御風らと交わって「自由詩社」を創設。明治四十二年（一九〇九）読売新聞社に入社して北原白秋、若山牧水らと詩壇の新運動に参加。家庭の事情で大正三年（一九一四）帰郷。瀧井孝作らとの『ツチグモ』の創刊、（大正三（一九一四））『飛驒新聞』創刊（昭和二十二（一九四七））を始めと山百合詩社、飛驒山刀俱樂部、飛驒短歌会などを育てて飛驒の文化に大きな足跡を残した。その才能から、飛驒という田舎にこもるのを惜しむ声もあった。昭和十七年（一九四二）高山食品卸市場が設立され常務取締役。

詩集『春の夢』、歌集『山花一束』『山づと』。

【飛驒人物事典】

【若山牧水】
わかやまぼくすい

明治十八年（一八八五）八月二十四日生、昭和三年（一九二八）九月十七日没

歌人。本名繁。宮崎県東臼杵郡東郷村（現日向市）の医師の長男として生まれる。

明治三十二年（一八九九）宮崎県立延岡中学校に入学。短歌と俳句を始める。十八歳のとき、号を牧水とする。明治四十一年（一九〇八）早稲田大学英文科卒、七月に処女歌集『海の声』出版。明治四十四年（一九二一）創作社を興して詩歌雑誌「創作」を主宰する。大正十五年（一九二六）詩歌総合雑誌「詩歌時代」を創刊。旅を愛し、旅にあつて各所で歌を詠み、日本各地に歌碑がある。大の酒好きで、一日一升の酒を呑んでいたといわれる。

【ウイキペディア】

六 大埜間霽江歌碑（三福寺）



三福寺町、曙橋西に位置する、都竹豊治氏宅入口脇にこの歌碑がある。飛騨短歌会創始者の大埜間霽江が師である都竹豊治氏が、自刻し自ら建てたものである。この歌は、大埜間霽江の師であり友人であった福田夕咲を追悼したものと思われる。

酒のみて
よしやとたつぬる
君がこえ
とわに聞きえす
雪降り志さる
霽江

おおいのませいこう

【大埜間霽江】 明治三十二年（一八九九）四月五日生、昭和五十七年（一九八二）六月二十九日没

内科医・歌人。丹生川村（現高山市）法力出身で高山市馬場町二に居住。岩之助の長男。斐太中学、東京慈恵会医学専門学校卒。東京で開業医をしていたが戦災を受け、昭和二十年（一九四五）高山市馬場町の父の「大埜間医舎」を継いだ。

少年時代から歌を詠み、在京中に終生の短歌の恩師となる芸術院会員・金子薫園と出会った。二十一年（一九五二）鎌手白映ら十一人で飛騨短歌会を結成し主宰に。二十七年（一九五二）高山市文化協会初代会長。高山市公安委員長、同社会教育委員など歴任。

歌集『一つ世界』『白樺』『高原の雲』高山市文化協会文化功労者（昭和三十（一九五五）

【飛騨人物事典】

つづくとよじ

【都竹豊治】 大正十三年（一九二四）六月九日生、平成十九年（二〇〇七）十月二十七日没

造園業・歌人。大八青年学校、陸軍中野学校卒。昭和二十七年（一九五二）造園業の「撫石園」創立。二十二年（一九四七）飛騨短歌会へ入会し四十四年（一九六九）平成八年（一九九六）編集同人。新アララギ同人。松之木町短歌グループ、萌木会など十以上の短歌グループを指導している。高山市文化協会副会長を務めた。

歌集『村から町へ』『石の声』『続石の声』。高山市学芸表彰（平成二（一九九二））。岐阜県芸術文化活動等特別奨励（平成九（一九九七））。岐阜県歌人クラブ賞（平成十一（一九九九））。

【飛騨人物事典】

七 大埜間霽江歌碑（丹生川）



丹生川町北方の正宗寺境内に、昭和四十七年（一九七二）春飛騨短歌
会有志により、飛騨歌壇に盡された業績を讃え、大埜間霽江の出生
の地に建設した。

霽江
天辺に
とり残されし
柿ひとつ
みかへる人の
なくてうれ
を里

八
車田碑



めぐりきて
春日かすめる車田に
おり立つ田子の
わさものとけし

東溟

見るもうし
植るも苦し車田の
めぐりめぐりて
早苗取るかな

金森重頼

【東溟】とうめい 天明五年（二七五）一月一日生、安政二年（二八五）七月十三日没

僧侶。京都上岡崎村八条家で出生、浄土真宗越前證誠寺の中興の祖。本名は代善、京都の国学者加茂秀鷹の高弟。文化八年（二八二）十月、二七歳の時上人号を許される。

東溟上人は飛驒の国学者、田中大秀と交流があった。その外にも国学者山崎弘泰、郡代小野高福とその子高堅（鉄太郎の異母兄）、鉄太郎、富田礼彦らが面会している。『公私日次記』によると、嘉永四年（二八五）五月十五日、若殿（高堅）、鉄太郎が東溟上人を七夕岩や車田に案内したとある。車田の歌はその時の感想を詠んだものであろう。

【デジタル版日本人名辞典】

【金森重頼】かなもりしげより 文禄三年（二五九）生、慶安三年（二六五）十月七日没

三代高山城主。金森可重の三男。母は名護屋因幡守高久の娘。飛驒生まれ。幼名は左兵衛。長門守・出雲守と称する。従五位下。

慶長十三年（二六八）に徳川家康の小姓。大阪夏冬の陣に父と従軍。元和一年（二二五）に父が死去し遺領を継ぐ。新田の開墾を進め鉾山を開発するなど藩財政の基礎固めをはかる。寛永八年（二六三）の飢饉で、家宝の茶器「雲山肩衝」を黄金三千金で売り、領民の救済に充てる。この茶器は徳川秀忠に献上したが「天下の名物だから家で秘蔵せよ」と返されたもの。重頼の発願による社寺は宗猷寺、東照宮、松泰寺（以上創建）、桜山八幡神社、法華寺、国分寺三重塔、天満宮社殿（以上再建）など、和歌や茶の湯を好み小糸坂に陶窯を開かせる。諡号は真竜院殿前雲州大守瑞雲祥大居士。高山の素玄寺に葬る。家臣の平岡三郎兵衛ら四人が殉死。

【飛驒人物事典】

九 堀左明翁之碑



左明堀翁○碑

翁諱文篤堀氏稱三藏法謚義章左明其號飛
驒高山人為人風流瀟灑不屑俗務平生好俳
諧○花以自○○而特善書受業者○多天保
七年丙申七月廿九日病没年六十有六頃者
門人其等謀立碣○松樹院未讀銘々日

生○自樂 沒為人慕

名傳永生 寄期松樹

嘉永四年辛亥春正月

浪華七十一老人篠崎弼撰并書

【堀左明】
ほりさめい

生年不詳、天保七年（一八三六）七月二十九日没

俳人・能書家。高山の人。通称は六蔵。名を文篤。

俳句と生花を好み、能書で門人が多かった。享年六十六。

【飛騨人物事典】

【篠崎 彌】
しのさきたすく

天明元年（一七八二）四月十四日生、嘉永四年（一八五二）五月八日没

儒学者、書家。大阪の人。幼名は金吾、名を彌、字は承彌、号は小竹で別号に畏堂・南豊・聶江・些翁など。通称は長左衛門。

九歳で篠崎三島の私塾梅花社に入門、古文辞学を受ける。寛政の改革が進む中、頼山陽に感化し、江戸に遊学。尾藤二洲に学び古賀精里の門に入り朱子学者に転向する。その後梅花社を継いだ。詩・書に優れ書籍を刊行しようとする者の殆どが、彌に序・題・跋等の文章を求める程の人氣があり、温厚で社交好きな性格は、関西学芸の名士であった。

【ウィキペディア】

一〇

富田豊彦歌碑



守^う禰^ねひ山^{やま}吹^ふき致^ちたへ来^きて長^の閑^ど那^か里^{なり}
三^み千^ちと勢^せちか幾^き松^か可^のぜ乃^こ聲^え

皇紀二千六百年令辰謹詠

八十一翁富田豊彦

富田豊彦歌碑

從六位勲八等檀園富田豊彦翁は萬延元年高山に生る祖父礼彦翁に和漢の學を垣内雲燐翁に書法を學び文波と號す裁判所書記斐太中学教諭を歷任志神職としては縣社日枝神社郷社荏名神社村社一本杉白山神社神明神社等に奉仕し奏任官の待遇を受く大正十三年田中大秀翁學統の文机を継ぎ老来益斯道に盡志しが昭和十五年十一月十八日急逝せらる享年八十一土佐日記註釈眞木佐久斐太乃山踏飛驒古今詠歌人名録檀園集其の他隨筆詩歌文集等著書多し

昭和十六年十一月建立

門人竝有志者石工高忠

とみたとよひこ

【富田豊彦】 万延二年（一八六〇）三月四日生、昭和十五年（一九四〇）十一月十八日没

国学者・神職。高山生まれ。道彦の子。幼名は銀之丞。号は文坡。

祖父の礼彦を始め佐々木弘綱、山崎弓雄らに国学や和歌、漢学などを学ぶ。日枝神社々司、斐太中学教諭など歴任。荏名門の文台を継承し門人を指導。『岐阜県飛騨国大野郡史』編纂委員の一人。従七位勲八等瑞宝章。

著書『飛騨古今詠人名録』『まゆみ園集』など。

【飛騨人物事典】

たかはらちゅうじろう

【高原忠次郎】 明治三十五年（一八九二）十月二十五日生、昭和三十年（一九五五）十二月二十三日没

石工。大名田村江名子出身で高山市吹屋町二に居住。通称は高忠。

富田豊彦翁歌碑（昭和二十六（一九五二））を始め日枝神社と護国神社の狛犬、各地の仏像、灯籠などを手掛けた。

【飛騨人物事典】



一一 文保 川上哲太郎（歌碑）

文保
お保^ほひたる
無^むらく茂^も
はれて
春む月は
清幾^き
北野に
てりわたる
那里^な里^り

かわかみてつたろう

【川上哲太郎】

明治四年（一八七二）九月二十七日生、昭和十九年（一九四四）一月二十五日没

高山食品卸市場（株）社長。高山町二之町生まれ。文保と号し和歌をよくする。

昭和十七年（一九四二）七月、高山食品卸市場（株）を創立し初代取締役社長。川上魚市場を改称した斐太食品工業（株）の社長も兼ねる。富田豊彦に和歌を学ぶ。日枝神社の山王神苑に文保歌碑がある

【飛騨人物事典】

一二

木然（金子大栄）歌碑



丹生川町坊方、浄願寺境内山門脇に木然の歌碑がある。以前「吉原鐘」で有名であった鐘は、戦時中に供出させられ、今は二代目となった。そのことを歌に詠んだものを、金子大栄から前住職の堤得忍が、色紙にしたためて、もらい受けていた。この意志を継いで、浄願寺住職得道がこの歌碑を建立した。

人の世の
名残はつきす
さ里ながら
涅槃なつかし
夕日をろかむ
木然

かねこ だいえい

【金子大栄】

明治十四年（一八八一）五月三日生、昭和五十一年（一九七六）十月二十日没

宗教学者。新潟県高田市生まれ、十五歳まで郷里にいたが、京都本願寺の中学校に入り、大谷大学の前身「真宗大学」を卒業した。

その後は宗教学特に真宗学の探求に努め、一生を成した。東洋大学、大谷大学、広島文理科大学を経て、大谷大学名誉教授となる。享年九十六歳。著書『仏教概論』『見真』他

【飛驒の文学碑遍歴】

一三

琴淵万葉歌碑



斐太人之真木流云爾布乃河
事者雖通船曾不通

ひだ人の真木流すちよう丹生の川
ことはいかよえど船ぞかよわず

明治二十年（一八八七）十一月、丹生村（現丹生川町）根方、琴淵の脇に、小笠原佐衛門太郎が歌碑を建立して寄付した。小笠原家は、代々地域の名家である。この歌には、学説種々あり、恋歌だとか、斐太の匠を詠んだものとか、あるいは飛驒とは関係なく、「丹生川」の地名と「琴淵」の名から、この地と結びつけて歌碑を建てたと云われるように、定かではない。

おがさわらさえもんたろう

【小笠原佐衛門太郎】

生年不詳、明治三十三年（一九〇〇）三月七日没

田園歌人。旧丹生川村（丹生川町）根方の人。号を後楽。同村根方区に琴渕万葉歌碑（爾布乃河）を建立。享年七十四歳。

【飛驒人物事典】

一四

島崎正樹歌碑



の け
き 能 ぶ 気 ぶ
い ぐ れ の 雨 と
も み ぢ げ
毛 三 遅 葉 と
あ ら そ ひ ふ れ る
も と の
山 毛 登 能 里
正 樹

島崎正樹は、中山道木曾馬籠宿で、本陣と庄屋の十七代当主。国学者平田篤胤の門に学んで、復古の思想に心酔していた。

明治七年（一八七四）飛騨の国では由緒のある、水無神社へ宮司として単身赴任する、本人は寂しい心の中にも安らぎを覚える日々を過ごしたものと思われる。この地で多くの歌を詠んでいる。

明治十年（一八七七）馬籠に帰るが、子ども等にもうとんじられ晩年は不遇であった。維新の運動に身を挺し、のち皇政復古の志もおなしく、享年五十六歳であった。

昭和四十五年（一九七〇）十一月二日自筆の一首を刻み没後百年の追慕としてこの歌碑が建立された。

しまざきまさき
【島崎正樹】

天保二年（一八三一）五月四日生、明治十九年（一八八六）十一月二十九日没

宮村（一之宮町）の水無神社宮司・島崎藤村の父。名は重寛。号は璞堂・静舎。藤村の小説『夜明け前』の主人公・青山半蔵のモデル。平田篤胤門下の国学者で馬籠駅名主、馬籠・湯舟沢両村の戸長など歴任。明治七年（一八七四）十一月から水無神社宮司。明治天皇の北陸巡幸の時、憂国の建白を試み叱責されるなど挫折をくりかえした末発狂し、座敷牢内で没する。著書『一宮祭神記』『一宮由緒記』、歌集『松が枝』『常葉集』など。

【飛騨人物事典】

ひらたあつたね
【平田篤胤】

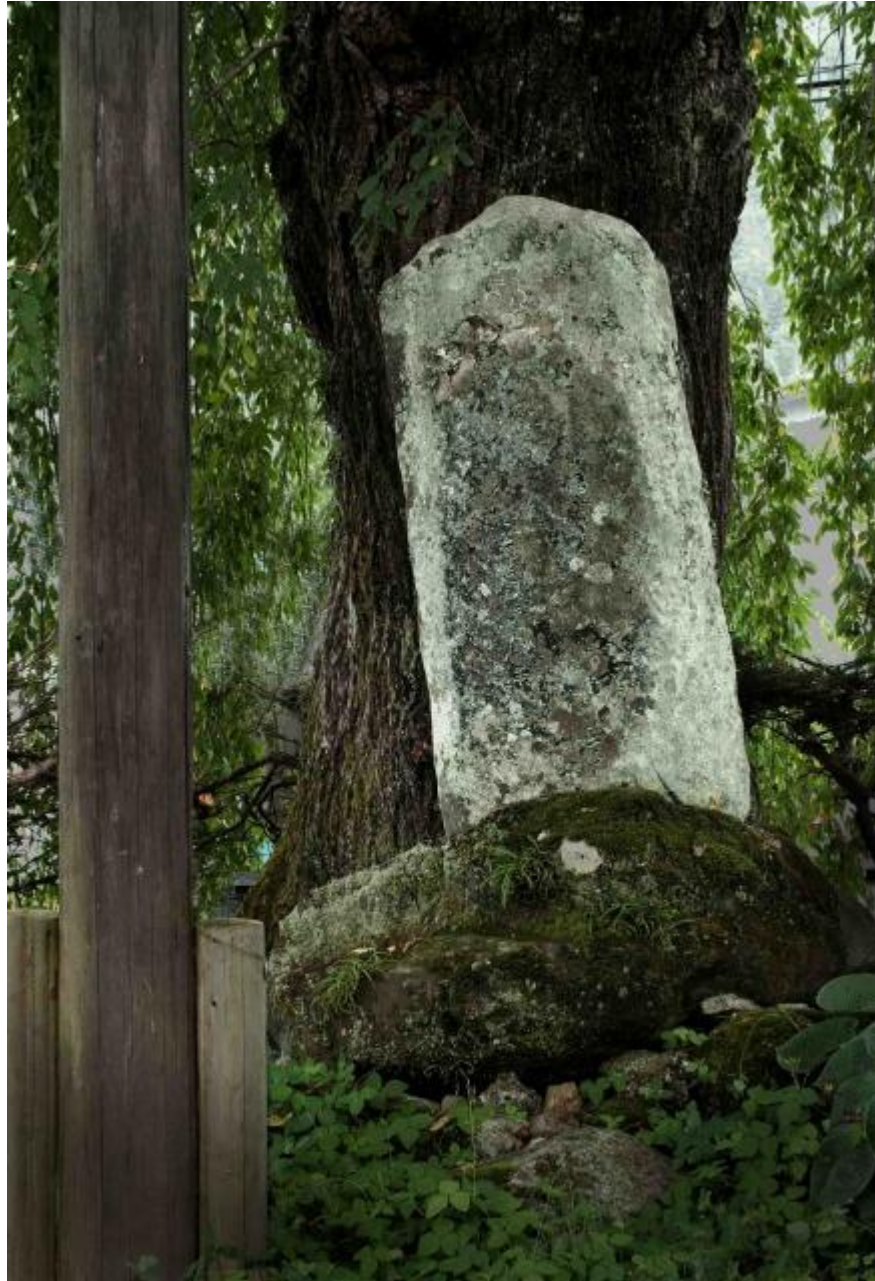
安永五年（一七七六）八月二十四日生、天保一四年（一八四三）九月十一日没

国学者、神道家、思想家、医者。出羽久保田藩（現在の秋田市）出身。成人後備中松山藩士の兵学者平田篤穂の養子となる。幼名を正吉、通称を半兵衛。元服してから胤行、享和年間以降は篤胤と称した。号は気吹舎（いぶきのや）、家號を真菅乃屋（ますげのや）。医者としては玄琢を使う。死後、神靈能真柱大人（かむたまのみはしらのおし）の名を白川家より贈られている。復古神道（古道学）の大成者であり、荷田春満、賀茂真淵、本居宣長とともに国学四大人（うし）の中の一人、本居宣長らの後引き継ぐ形で儒教・仏教と習合した神道を批判し、やがてその思想は水戸学同様尊皇攘夷の支柱となり、倒幕後の明治維新変革期の原動力ともなった。その思想は後の神仏分離等に影響を与えた。

【ウィキペディア】

一五

恵明（新井久左衛門（雨鳩）句碑



よそに見亭^て
住は苦のなき月夜哉

恵明

内 天保六年（一八三五）九月友人高山の東有（平瀬市兵衛）が朝日村（朝日町）秋神の松円山法正寺境
に新井久左衛門、俳名「雨鳩」、法名「釈恵明」の句碑を建立した。

あらいきゅうざえもん

【新井久左衛門】 生年不祥、天保六年（一八三五）五月九日没

俳人・益田郡宮之前村（下呂市）生まれ。号は雨鳩。

代々久左衛門を襲名し九代。風雅の道に通じ俳諧をよくし、高山の平瀬東有、赤田臥牛と交流。明朗で温和な人で阿多舎（アダシヤ）と敬称される。享年六十三歳。

【飛騨人物事典】

ひらせとうゆう

【平瀬東有】 生年不祥、嘉永二年（一八四八）九月十八日没

俳人・高山の人。市兵衛と称する。水音社の五世宗匠。享年八十二。

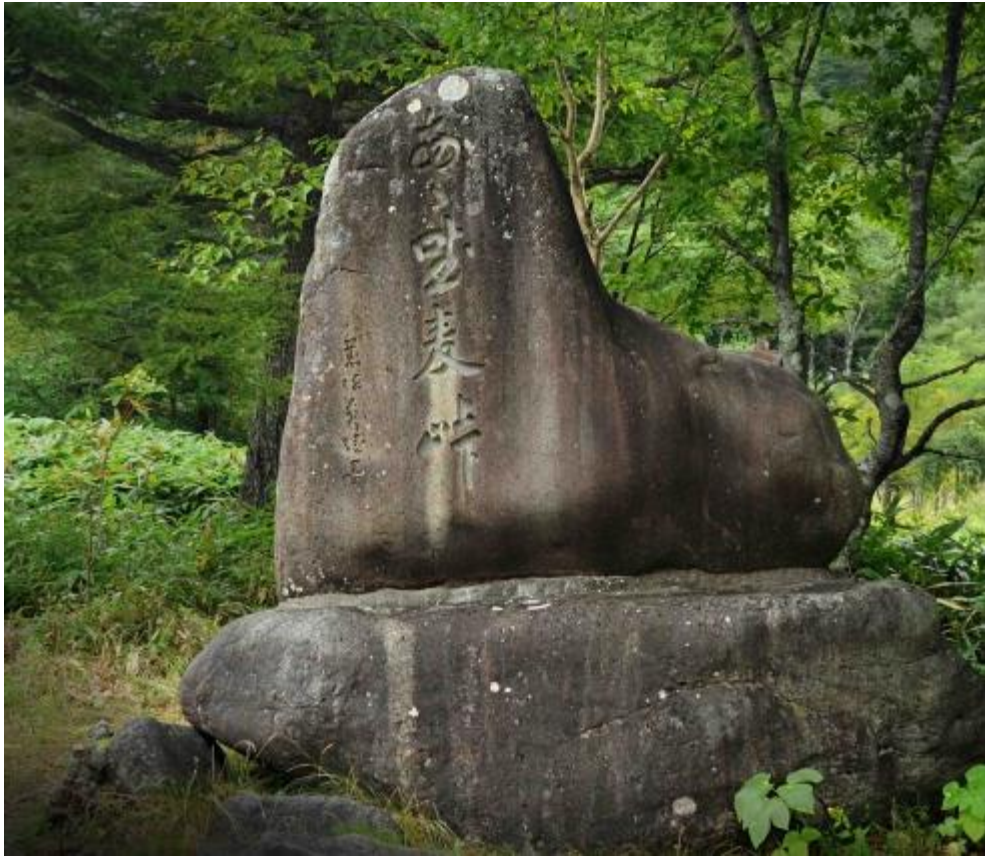
【飛騨人物事典】

すいおんしゃ

【俳諧結社 水音社】

第十二代飛騨代官（後郡代）大原彦四郎紹正は、俳諧を好んで清流亭楚諾と号し明和三年（一七六六）同志と共に俳壇水音社を高山に興し、第一世の宗匠となった。同七年（一七七〇）俳集「鳥の跡」一卷を刊行した。安永騒動以後水音社は一時振るわなかったが、近藤一左、平瀬東有・小野柳永・代情順教等によって幕末頃迄続き、明治時代絶えたが、上木雨台に依って再興された。

【高山市史】



あゝ野麦峠

荒垣秀雄書

野麦街道は、古くは大和の都と信濃を結ぶ官道で、東山古道と云われた街道であった。その後も飛騨と信州を人と物資が往来する等、重要な役割を果たした峠である。以後鉄道の整備、交通輸送の発達等で、野麦峠は観光地として姿を変えるようになった。

昭和四十三年（一九六八）十月三十日、明治百年にあたり、かつての栄枯盛衰と、その変遷歴史を忍び、記念にこの碑を、岐阜県高根村と長野県奈川村が共同して建立した。

昭和四十三年（一九六八）、作家の山本茂実が「あゝ野麦峠」として出版するや、大きな反響となり、昭和五十四年（一九七九）には、映画化されて一躍「野麦峠」が注目されるようになった。文学作品の舞台に建つ「あゝ野麦峠碑」である。

【荒垣秀雄】 あらがきひでお

明治三十六年（一九〇三）七月十九日生、平成二年（一九八九）七月八日没

朝日新聞論説委員。舟津町（飛騨市神岡町）出身で東京都に居住。斐太中学、早稲田大学経済学部卒。

朝日新聞東京本社々会部長などを経て論説委員。「天声人語」欄を十七年六か月にわたって執筆してコラムの一つの典型を確立し、昭和三十年（一九五五）に菊地寛賞。日本自然保護協会会長、日本ペンクラブ名誉会員など歴任。

著書『国栄えて山河ほろぶ』『天声人語』『自然と人生』など。神岡町名誉町民（昭和四十五（一九七〇）。勲二等旭日重光章（昭和五十（一九七五）。東京都名誉都民（昭和六十二（一九八七））。

【飛騨人物事典】

【山本茂実】 やまもとしげみ

大正六年（一九一七）二月二十日生、平成十年（一九九八）三月二十七日没

作家。長野県松本市生まれで小平市に居住。早稲田大学文学部卒。

昭和二十三年（一九四八）「葦」会を組織。雑誌『葦』『潮』を創刊し、戦後の青年運動に大きな影響を与えた。その後執筆に専念し、四十三年（一九六八）『あゝ野麦峠』を発表してロングセラーとなった（のち映画化）。青年海外協力隊の発足から隊員訓練所講師を務め、三十七年（一九六三）に外務大臣表彰。

著書『高山祭』『喜作新道』ほか。

【飛騨人物事典】

一七

御母衣ダムの碑



す、みゆく
御代の
しるし
うもれて
も
莊白川
の
名を
ここに
昭和辛丑春
佐々木信綱先生作歌
高碕達之助
かく

昭和三十六年（一九六二）六月十二日、莊白川の巨木の下で、水没記念碑ならびに高碕達之助の歌碑が同時に除幕された。その歌碑の裏面には次のように記されている。

「昭和廿七年十月十八日総理府告示第二三七号を以て御母衣発電所電源開闢基本計画が発表されるや、郷土死守の声旺盛とおこり、水没地区住民はもとより莊白全村あげて、これが対策に腐心しダム建設の中止又は計画変更を、強力に要請し続けたのであった。その間電源開闢事業の重要性日増しに加わるとともに、水没地区内に於いても反対運動に複雑な動きが生じ遂に昭和廿八年一月十三日御母衣ダム絶対反対期成死守会が志を同じくする者百五十名を以て組織され反対運動に新組織を画したのである。爾来死守会を解散した昭和三十四年十一月廿二日まで実に八年の間純粹にして熾烈なる反対運動は水没民の生活に直接甚大な影響を与えながら推移したのであった。ダム建設により湖底に没した地域面積実に七百ヘクタール世帯二四〇戸公立学校三管林署貯木場二郵便局一農協支所一神社五寺院三重要文化財二天然記念物二その他莊白村財政上に及ぼした損失実に六割に垂んとするのである。御母衣ダムがこれら多くの苦難に満ちた闘いと犠牲の上に建設されたことを記念するとともに、祖先墳墓の地を湖底に没するの苦哀を天に訴えて尚盡さず、よってこの地に祖先の御霊を祀りて共同墓地となし永く後世に伝えることとする

昭和三十六年五月建之」

ささきのぶつな

【佐々木信綱】 明治五年（一八七二）七月八日生、昭和三十八年（一九六三）十二月二日没

歌人、国文学者。三重県鈴鹿郡石薬師村（現鈴鹿市石薬師町）佐々木弘綱の長男として生まれる。父の教えを受けて五歳にして作歌。明治十七年（一八八四）東京大学文学部古典講習科入学。明治二十三年（一九〇〇）父と共編で『日本歌学全集』全十二冊の刊行開始。明治二十九年（一九〇六）森鷗外の「めざまし草」に歌を発表し、歌誌「いささ川」を創刊。また落合直文、与謝野鉄幹らと新詩会をおこし、新体詩集『この花』を刊行。短歌結社竹柏会を主宰し、木下利玄、川田順、他多くの歌人を育成。国語学者の新村出、翻訳家の片山広子、国文学者の久松潜一も和歌を学んだ。

昭和十二年（一九三七）文化勲章を受章、帝国芸術院会員。御歌所寄人として歌会始撰者でもある。

【ウイキペディア】

たかさきたつのすけ

【高碇達之助】 明治十八年（一八八五）二月七日生、昭和三十九年（一九六四）二月二十四日没

政治家、実業家。電源開発初代総裁、通産大臣、初代経済企画庁長官等。

大阪高槻市生まれ、旧制茨木中学卒、農商務省水産講習所（現東京海洋大学）に入所、水産技師として活躍。昭和十三年東洋製罐専修学校（後の東洋食品工業短期大学）を設立。昭和十七年、満州重工業開発総裁に。昭和二十七年、電源開発総裁に就任。佐久間ダム建設など大事業を成功、御母衣ダム建設では、世界植樹史上に残る「莊川桜」移植事業を発案、推進した事でも名高い。

高槻市の百姓兼紺屋の七人兄弟の三番目で、子どもの頃四条村野崎（現大東市野崎）の酒屋に預けられた。

【ウイキペディア】

一八

莊川桜の碑



かつて大野郡莊川村（高山市莊川町）中野の照蓮寺と光輪寺の境内にあった樹齡三百年余のあずまひがんごくらは、御母衣ダムの建設に伴って湖底に沈む運命にあったが、昭和三十四年（一九五九）晩秋この地を訪ねた電源開発初代総裁高碕達之助はこれを惜しみ、移植する考えを洩らした。これに応えて当代藤井崇治総裁始め関係者により、「やがては立退者一同が昔を忍ぶすがともなるだろう」と、桜について造詣の深い笹部新太郎翁の調査のもと、昭和三十五年（一九六〇）十二月株式会社間組・造園家の丹羽政光により移植し、その名を莊川桜として、これを記念して句碑を建立した。

【ウィキペディア】

高碕達之助作
ふるさとは水底となりぬ
うつし来しこの老桜
咲けとこゝへに
藤井崇治書

【藤井崇治】ふじい そうじ 明治三十七年（一八九四）七月一日生、昭和五十年（一九七五）三月十八日没

通信官僚、電源開発総裁。広島県深安郡山野村（現福山市山野町）出身。広島県立福山中学（現福山誠之館高校）、旧制第三高等学校、京都帝国大学法学部法律科卒。

通信省入省。郵便戸番制の採用など独創的な方策を樹立。昭和二十九年（一九五四）電源開発副総裁として、御母衣ダム建設での補償交渉などにあたり、反対派住民の態度を軟化させた『幸福の覚書』の逸話が残る。昭和三十三年（一九五八）電源開発総裁に就任。この御母衣ダム建設工事で移植した、かの有名な巨桜を昭和三十七年（一九六二）六月に行なわれた水没記念碑除幕式で「莊川桜」と命名した。

昭和三十七年（一九六二）、藍綬褒章、昭和四十年（一九六五）、勲二等旭日重光章受章。

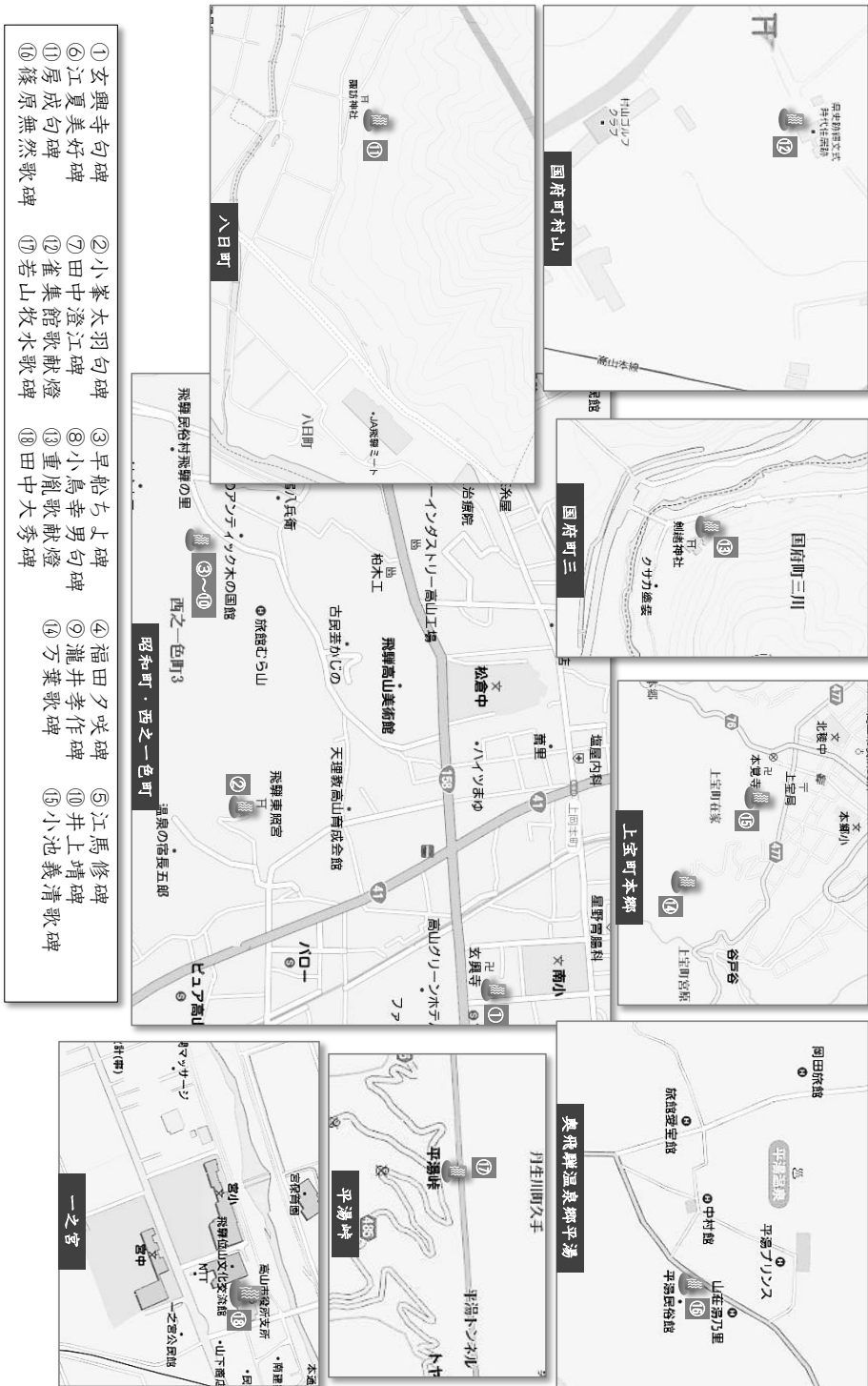
【ウィキペディア】

第十六回 近代文学館作品展 ―西部地区と旧吉城郡編―

平成二十四年二月十日（金）～十二日（日）

一 地図

第16回 高山市近代文学館企画展
『郷土の文学碑展』～西部地区と旧吉城郡編～
文学碑位置図



二 玄興寺句碑



炬燵して
あり有難き
玄興寺
割石

こうのすひろじ

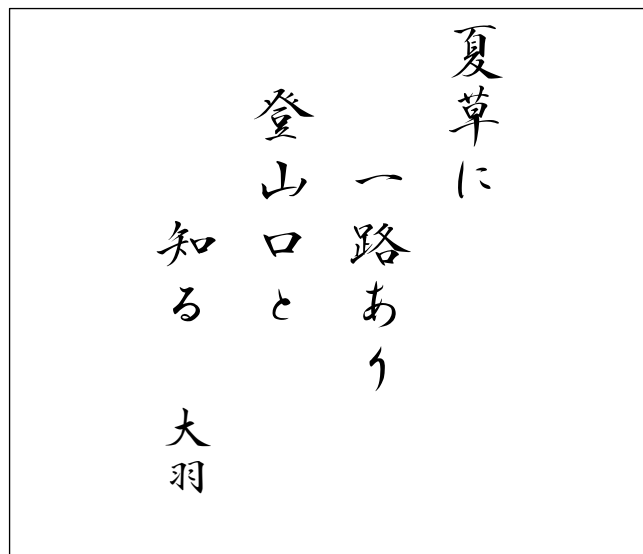
【鴻巣博司】 明治四十一年（一九〇八）三月二十四日生、昭和六十一年（一九八六）七月十九日没

美野火吟社代表。大名田村西之一色出身。号は割石。大名田尋常高等小学校卒。

高山別院前の三浦齒科技工師で修業。瀬戸市に鴻ノ巣齒科技工所を開いた。高山の玄興寺境内に「炬燵してあり有難き玄興寺」の句碑がある。

【飛驒人物事典】

三 小峯大羽句碑



飛騨地方の文化の発展と、近代俳句開眼に寄与した小峯大羽の功績を讃え、平成八年（一九九六）九月二十二日、文学散歩道から少し離れた東照宮の境内に、社団法人高山市文化協会は、遠藤弘典氏の協力を得て建設した。

こみねたいう

【小峯大羽】

明治六年（一八七三）二月十五日生昭和二十年（一九四五）五月二十四日没

俳人。画家・郷土史家。東京神田生まれ。名は邦寿。号を大羽楼大羽。東京府立毛筆画伝習所卒。文学を尾崎紅葉、画を狩野洞谷に学ぶ。富岡永洗の藻斉画塾の客員、『風俗画報』を始め新聞、雑誌の挿絵を手掛けるなどした。俳句では二十五歳から新聞、雑誌の選者として活躍し『高潮』を主宰。徳田秋声らと交流。明治四十五年（一九三二）に飛驒を訪れて魅せられた大羽は、大正二年（一九一三）に高山へ転居。飛驒史談会創立者の一人となり『飛驒史壇』の編集を担当。地元の俳句結社の指導なども行い、飛驒の文化に広く貢献。昭和七年（一九三二）に名古屋へ転居。編著『俳句大観』『東京語字典』『蘭亭遺稿』。

【飛驒人物事典】

おざきこうよう

【尾崎紅葉】

慶応三年（一八六六）一月十日生、明治三十六年（一九〇三）十月三十日没

小説家。本名、徳太郎。号は縁山、半可通人、十千万堂等。江戸（東京）生れ。帝国大学国文科中退。

明治十八年（一八八五）、山田美妙らと硯友社を設立し「我楽多文庫」を発刊。『二人比丘尼色懺悔』で認められ、『伽羅枕』『多情多恨』などを書き、幸田露伴と並称され（紅露時代）明治期の文壇の重きをなした。明治三十年（一八九七）から『金色夜叉』を書いたが、未完成のまま没した。泉鏡花、田山花袋、小栗風葉、柳川春葉、徳田秋声など、優れた門下生がいる。俳人としても角田竹冷らとともに、秋声会を興し正岡子規と並んで新派と称された。明治十六年（一八八三）に東大予備門に入るが、それ以前から縁山と号して詩作にも努めていた。

【飛驒人物事典】

とみおかえいせん

【富岡永泉】

元治元年（一八六四）三月二十三日生、明治三十八年（一九〇五）八月三日没

浮世絵師、日本画家。小林永濯の門人。通称は秀太郎。号を藻斎。信濃国（現・長野県）生れ。初めは独学で絵を学び、青年期に陸軍参謀本部で製図の仕事をしたが、十八歳の時に小林永濯に付いて浮世絵を学んで、藻斎永泉と号した。画業の傍ら雑誌の挿絵も手掛け、艶やかな美人画で評判を得た。明治二十三年（一八九〇）画業に専念し、風俗画を得意としており、都新聞に入社、挿絵画家として毎日連載小説挿絵を描くようになった。明治二十年（一八八七）代から明治三十年（一八九七）代に肉筆浮世絵の美人画で活躍、松本楓湖や梶田半古らとともに日本画会を創立するが、後に退会。一方で、岡倉天心の日本美術院特別賛助員となる。

とくだしゅうせい

【徳田秋声】

明治四年（一八七二）二月一日生、昭和十八年（一九四三）十一月十八日没

小説家。本名は末雄。随筆『思い出るまゝ』には、「私は幼い時分から孤独であつた。憂鬱の虫が体中に巣くつてゐた」と記されている。

明治二十四年（一八九一）、父が死去したため、大阪の長兄を頼るなど各地を転々とし、郡役所の雇員、新聞記者、英語教師などをしながら放浪生活を送る。明治二十八年（一八九五）博文館の編集部に職を得、当時博文館に出入りしていた泉鏡花の勧めで紅葉の門下に入る。翌年、被差別部落の父娘に取材した『藪かうじ』を「文芸倶楽部」に発表して「めざまし草」の月評欄に取り上げられ、これが実質的処女作となる。以来、泉鏡花、小栗風葉、柳川春葉とともに紅門の四天王と称される。明治三十三年（一九〇〇）読売新聞に連載した『雲のゆくへ』が出世作となる。

四 早船ちよ文学碑



峠に立つと
見えなかった風景が
ひらけてくる
川そいの村、森、遠い町・・・
そこへいく、ひとすじの道。
峠に立つと
見えなかった山やまが
あらわれる
そのさきにも峠、またそのさきにも。
そして、未知の世界が
呼びかける
峠をこえておいでーと。
小説「峠」の序詞
早船ちよ

平成元年（一九八九）十二月十日、早船ちよが卒業した高山町立女子尋常高等小學校の同窓会「藤紫の会」（渡辺たづ代表）、飛騨庭石（株）の寄付と、一口一万円で市民の皆さんに呼び掛けた建設基金により、社団法人高山市文化協会が建設した。

除幕式では高山市文化協会会長は「文学散歩道が飛騨の文化の高揚と観光の振興につながれば・・・。」と語っている。

碑文の詩は、『峠』の冒頭の記述で、主人公が峠を越えて飛騨を出ていくときの思いを描いたものである。

はやふね

【早船ちよ】 大正三年（一九一四）七月二十五日生平成十七年（二〇〇五）十月八日没

作家。児童文学者。古川町三之町に生まれ、高山市有楽町で育った。旧姓は住田。高山女子尋常高等小学校高等科卒。

昭和一年（一九二六）『飛騨毎日新聞』が募った「十年後の飛騨」論文で審査外特別作品となり、将来への片鱗を見せた。八年（一九三三）上京。評論家の井野川潔と結婚し童話を書き始めた。三十六年（一九六一）代表作『キューポラのある街』を執筆し、日本児童文学者協会賞など受賞。『ポンのヒッチハイク』でサンケイ児童出版文化賞。

平成九年（一九九七）古川町に「早船ちよ文学館」開館。『ちさー女の歴史』『早船ちよ幼年童話』十卷など著書七十冊以上。

【飛騨人物事典】

五 福田夕咲歌碑



昭和二十九年（一九五四）四月、飛騨短歌会と飛騨ニュース社が、市内上野町にあった「鹿の湯」前庭の通路にこの福田夕咲の歌碑を建てた。その後「鹿の湯」は廃業し、建物を取り壊して宅地に造成するため、夕咲の歌碑は撤去されていたが、平成二十三年（二〇一一）八月十日、短歌会「萌木会」から移設費用の一部の寄付を得て、社団法人高山市文化協会が、西之一色町の文学散歩道から上野の丘陵が望める、この場所に移設し、高山市へ寄贈した。

いわのなる 夕咲
沼の水乃面に
白くもの
うつろう
みれば
そぞろさびしき

ふくだゆうさく

【福田夕咲】 明治十九年（一八八六）三月十二日生、昭和二十三年（一九四八）四月二十六日没

詩人・歌人。高山市大新町一の人。吉郎兵衛（敦雄）の四男。本名は有作。斐太中学、早稲田大学文学部卒。

学生時代から人見東明、相馬御風らと交わって「自由詩社」を創設。明治四十二年（一九〇九）読売新聞社に入社して北原白秋、若山牧水らと詩壇の新運動に参加。家庭の事情で大正三年（一九一四）帰郷。瀧井孝作らとの『ツチグモ』の創刊、（大正二（一九一四））『飛驒新聞』創刊（昭和二十二（一九四七））を始め山百合詩社、飛驒山刀俱樂部、飛驒短歌会などを育てて飛驒の文化に大きな足跡を残した。その才能から、飛驒という田舎にこもるのを惜しむ声もあった。昭和十七年（一九四二）高山食品卸市場が設立され常務取締役。

詩集『春の夢』、歌集『山花一束』『山づと』。

【飛驒人物事典】

ひとみとうめい

【人見東明】 明治十六年（一八八三）一月十六日生、昭和四十九年（一九七四）二月四日没

詩人・教育者。本名は圓吉。昭和女子大学（日本女子高等学院）の創設者。東京都生まれ。

早稲田大学高等師範部英語科を卒業後、読売新聞社に記者として勤務する。明治四十二年（一九〇九）加藤介春、三富朽葉らとともに自由詩社を結成、口語自由詩運動の基礎を作り、新体詩の普及に努めた。大正九年（一九二〇）に日本女子高等学院（現在の昭和女子大学）を創立し、教育者としての功績も残している。

そうまぎょうふう

【相馬御風】

明治十六年（一八八三）七月十日生、昭和二十五年（一九五〇）五月八日没

詩人・歌人・評論家。本名は昌治。新潟県糸魚川市出身。早稲田大学文学部哲学科卒業。

早稲田大学校歌「都の西北」をはじめとした多くの校歌や童謡の作詞者としても知られる。雑誌「早稲田文学」の編集に参加。野口雨情・三木露風らとともに「早稲田詩社」を設立し、口語自由詩運動を進めた。明治四十四年（一九二一）早稲田大学講師となる。大正五年（一九一六）内面を告白した『還元録』を刊行し、故郷糸魚川に隠棲する。帰郷後は主として良寛の研究に携わったほか、童謡・童話も発表した。

きたはらはくしゅう

【北原白秋】

明治十八年（一八八五）一月二十五日生、昭和十七年（一九四二）十一月二日没

詩人、童謡作家、歌人。熊本県南関生れ。

詩、童謡、短歌以外にも、新民謡（「松島音頭」・「ちやつきり節」等）の分野にも傑作を残している。生涯に数多くの詩歌を残し、今なお歌い継がれる童謡を数多く発表するなど、活躍した時代は「白露時代」と呼ばれる近代の日本を代表する詩人である。明治二十二年（一八九）には成績下落のため落第。この頃より詩歌に熱中し、雑誌『文庫』『明星』などを濫読する。ことに明星派に傾倒したとされている。明治三十四年（一九〇二）、同人雑誌に詩文を掲載。この年、初めて「白秋」の号を用いる。明治三十七年（一九〇四）早稲田大学英文科予科に入学。上京後、同郷の若山牧水と親しく交わるようになる。

六 飛驒山岳会百周年記念碑



腰の
山刀
伊達には
差さぬ
山郷育ちの
ララ荒男
夕咲

飛驒山岳会創立一〇〇周年を
記念して、平成二十年（二〇〇八）
八月、文学散歩道沿いの「山岳
資料館」前に建設した。

碑文は大正九年（一九二〇）に福田
夕咲が作詩した「アルプス節」
の第一節を用いている。「アルプ
ス節」は、「飛驒山刀俱樂部」か
ら「飛驒山岳会」の会歌として
引き継がれ、今日も飛驒山岳会
員の心の拠り所として、愛唱さ
れている。

七 江馬修文学碑



歴史の本舞台から
すっかりおき去りに
され、日本でもまれ
な奥ふかい山国のま
ん中にすてられた孤
児のように三百年も
知られない、ひそか
な存在をつづけてき
た城下町の高山は、
折から暗い、あつひ
もやと雪に蔽われて
、音もなく、深い眠
りの中にあった。
(山の民より)

昭和四十九年(一九四七)、西之一色町の「飛騨民俗館」から新しく設置される「飛騨の里」の間の約六五〇メートルを小径で結ぶこととなり、その小径を「文学散歩道」と位置付けて、郷土出身の作家たちの文学碑を設置することとなった。

江馬修の「山の民」は、明治維新後の、梅村騷動を描いたもので、作家の大岡昇平は「(前略)歴史の「自然」を破壊せずにその中の劇的な契機を取り出すという方向において最高の成果を収めている……。」と作品を評している。

郷土の江馬修の功績を讃えて、社団法人高山市文化協会は、この地に文学碑を建設した。

【江馬修】
えまなかし

明治三十二年（一八九）十二月十二日生、昭和五十年（一九七五）一月二十三没

小説家。高山町空町生まれ。地役人・江馬弥平の四男。

斐太中学を中退し上京。神田区役所に勤める傍ら田山花袋の門に入り、自然主義文学に取り組んだ。明治四十四年（一九一）に処女作の短篇『酒』で文壇デビュー。大正五年（一九一六）ヒューマニズムを基調とした長編『受難者』がベストセラー。関東大震災を体験して社会主義に関心をもち、マルクス主義に入っていく、大正十五年（一九二六）に日本プロレタリア作家同盟参加、中央委員を務め、全日本無産者芸術連盟機関誌『戦旗』編集委員となった。後に、思想弾圧が強まったため飛騨へ帰り、雑誌『ひだびと』の編集に携わる傍ら、代表作となる長編『山の民』を執筆。昭和十六年（一九四一）には角竹喜登らと飛騨文化連盟を結成。戦後は再び上京し「人民文学」の創刊に参加。「アカハタ」に『本郷村善九郎』などを発表。

【飛騨人物事典】

「山の民」

飛騨高山は徳川幕府の天領として封建的な体制下にどっぷりと浸かった山村であった。慶応四年（一八六八）、明治新政府の代表者として、最初に派遣された国学者竹澤寛三郎は、人心掌握のため年貢半減、諸運上軽減廃止等を布告したが、その施策は新政府の方針に反して理想的すぎたために罷免される。替わって、もと水戸藩浪士梅村速水が新たな県知事として赴任してくる。梅村は理想に燃えた若き俊才で、着任早々、次々と急進的な改革を推し進め、飛騨高山の土俗的風習や伝統的制度との対立を深めていく。さらに新政府の矛盾した政策の忠実な実行者としての役割を演じていく。そして、村娘おつるを迎えたことで、すべてが裏目に出ていく。

うめむらはやみ

【梅村速水】

天保十三年（一八四二）生、明治三年（一八七〇）十月二十六日没

初代高山県知事。本名は沼田準次郎。別名を千原精一郎・泉原静逸郎・秋元寒介・桜井誠一・佐倉静逸・梅村準。水戸藩士沼田泰晦の二男。

水戸学を学び脱藩して諸国を廻り勤皇派の諸士と交わる。明治一年（一八六八）三月十三日竹澤寛二郎から事務を引き継ぎ、内国事務局権判事として飛騨統治の任につく。梅村は二十七歳で高山県知事に任命され、翌明治二年（一八六九）三月十四日に解任されるまでの一年間に、有能な人材の登用、商法局の設置、高山人別米と山方米の廃止、徴兵制の実施、学校の建設など次々新しい政策を実施。急激な改革になじまない民衆と、不満を持つ旧地役人や商人の反対運動から暴動へと発展。暴動を鎮圧するため上京中の二月、火事場の喧嘩が発端で打ち壊しが始まり、飛騨全体で百五軒が焼かれたり壊された。暴動を知った梅村の帰りを、反対する一万余人の人々が、投宿した萩原の戸谷権十郎の家に押し寄せ火を放つ。梅村は胸を撃たれて負傷し、苗木城に逃げた。新政府は梅村を解任し四月に東京刑法官へ引き渡したが、罪状未決のまま伝馬町の獄中に死去。

【飛騨人物事典】 抜粋

すみたけよしのり

【角竹喜登】

明治十八年（一八八五）一月二日生、昭和三十九年（一九六四）三月十九日没

学校長・郷土史家。高山市八軒町の人で晩年は岐阜市に居住。号は如山。斐太中学卒。

高山女子尋常高等小学校の代用教員を振り出しに教育界に身を置き、莊川尋常高等小学校と丹生川尋常高等小学校の各校長、斐太中学教諭などを歴任。生涯を郷土史研究にささげ『高山市史』『国府村史』『丹生川村史』『灘村史』等を編纂。岐阜県史跡天然記念物調査委員。昭和三十二年（一九五七）高山市郷土館の初代館長に就任し、三十八年（一九六三）名誉館長。郷土関係の収集資料六万三千点を高山市郷土館へ寄贈。岐阜県教育功労者表彰（昭三三（一九五八））。

【飛騨人物事典】

八 江夏美好文学碑



飛驒は「^げ下々の^げ国」である。

大化の改新（西暦六四^{（五）}六年）の

おり国制を「大・上・中・下」

の四等に定められたが、飛驒は

山また山の辺鄙ゆえ、下国のな

かでも「下々の国」と呼ばれた

という。

「下々の女」より

江夏美好

えなつみよし

【江夏美好】

大正十二年（一九二三）一月十九日生、昭和五十七年（一九八二）七月十七日没

小説家。阿曾布村出身、名古屋などに居住。本名は中野美与志。高山高等女学校中退。

昭和十八年（一九四三）大阪商工会議所が公募した戯曲で「母ぐるま」が入選。二十七年（一九五二）には「ごんぼ」で文学界新人賞を獲得し「文芸首都」の同人となった。三十二年（一九五七）から名古屋市に住み、三十四年（一九五九）同人誌「東海文学」を主宰。新人の育成を図りながら地方在住の作家として創作活動を展開。

著書に『脱走記』『流難の記』（共に直木賞候補）といった歴史小説のほか、『檻の中の女』『阿古女のうた』『飛驒雪解』など。代表作に飛驒の女の一生を描き、田村俊子賞を受けた『下々の女』（昭和四十六（一九七二））

【飛驒人物事典】

「下々の女」

作品の舞台となった奥飛驒が「山また山の辺鄙ゆえ」に「下々の国」と呼ばれたことに由来する。作者は白川郷に生きた「底辺の女」の一生を縦系に、大家族制等の日常生活を横系に、一編の長大な物語を織り上げた。

明治十八年（一八八五）主人公の森下ちなは、白川村平瀬の旧家に生まれ、少女期を合掌家屋の大家族とともに過ごす。苛酷な自然環境が、地域の閉鎖性や、そこに生きる人間の心理的葛藤は、郷里での生活への離反をもたらし、十八歳になったとき出奔。憧憬の念で高山での都会生活、結婚後一家の長い鉱山生活を経て、主人公の心に募ったのは、やみがたい郷愁の念であった。かつて拘泥を抱いたはずの合掌造りの家屋と大家族、奥飛驒の風土という生活環境そのものが、後年、彼女を限りない愛着とともに郷里へと引き戻したのであった。

作者は豊かな感受性をもつ登場人物の造形、生き生きとした風景描写、正確な歴史的叙述によって白川郷の風土を余すところなく表現している。『下々の女』には文明化によって変貌を余儀なくされる郷里の風土に対する作家の限らない愛情と確固とした保全意識がみなぎっている。

田村俊子賞

田村俊子の死後に発生した印税を基に設立された文学賞。女流作家の優れた作品に贈られる。「田村俊子会」が主催。俊子の友人だった湯浅芳子を中心となって設立し、第十七回で終了した。俊子に夫を寝とられた佐多稲子も選考委員を努めた。その様子は瀬戸内寂聴『孤高の人』に詳しい。

九 田中澄江文学碑



文学碑は、コサカ種苗の先代、小阪吉造氏が十七、十八歳の頃、東京板橋の種問屋であった田中澄江氏の実家に奉公し、吉造氏が幼い田中澄江氏の身の回りの世話などしたことから、コサカ種苗社長、小阪慶一氏の熱意と寄付によって、建立された。田中澄江氏の山好きに配慮し、北アルプスを一望できる文学散歩道に設置した。随筆集『山がそこにあるから』では、「もうあの稜線に立つことはない。かつて、こんな切ない別れを人としたことがなかった。」「高山に、私のふるさどがある。」など、北アルプスや高山への親しみを随所に示している。

飛驒の高山に人々は
何を求めてゆくのか
木で造られた町の姿の

よさ

それが古びて
なお存在する美しさ

そこには日本の遠い昔からの
伝統的建築様式があるだけで

なく

そこに住みついた人間の
心の歴史もまた積み重なって
いる

一九九七年元旦

田中澄江

八十八才

たなかすみえ

【田中澄江】 明治四十一年（一九〇八）四月十一日生、平成十二年（二〇〇〇）三月一日没

小説家・劇作家・双六山楽共和国大統領。東京板橋生まれで東京都中野区に居住。旧姓は辻村。お茶の水女子大学文科卒。劇作家の田中千禾夫の妻。

小説集『カキツバタ群落』で芸術選奨文部大臣賞（昭和四十八（一九七三）、小説『夫の始末』で紫式部文学賞と女流文学賞（平成八（一九九六）を始めブルーリボンシナリオ賞、紫綬褒章など受賞。登山と花を好み、平成一年（一九八九）発足した「双六山楽共和国」の初代大統領を務めた。九年（一九九七）飛騨民俗村文学散歩道に文学碑が建設された。

【飛騨人物事典】

一〇

小鳥幸男句碑



山が来て坐り直せる土用かな

幸男

おどりゆきお

【小鳥幸男】

昭和六年（一九三一）八月三日生

(株)高山市民時報社代表取締役会長（前代表取締役社長）・(社)高山市文化協会会長・俳人。大垣市出身。旧姓は江黒。斐太高校卒。

昭和二十一年（一九四六）高山市職員となり、市民課長、観光課長を経て退職。五十九年（一九八四）高山市民時報社に入社、同年株式会社に改組し代表取締役社長。(有)クロノス、(株)市民時報旅行などグループ社の代表取締役を兼務。(社)高山市文化協会会長。高山市行政改革審議会議長。高山商工会議所副会頭。高山市環境審議会議長。(宗)桜山八幡宮氏子総代会会長。俳誌『飛驒』代表。俳誌『河』当月集同人。

句集『雪』『トロイの城』『死語と寝て』。著書『飛驒百景』『小鳥幸男著作選集』『飛驒の子守歌』、長唄「高い山から」を作詞。高山ロータリークラブ会長など歴任。高山市自治功労者（昭五六（一九八一））。岐阜県学芸功労表彰（平一〇（一九八八））。高山市芸術文化顕彰受賞（平十八（二〇〇六））。

【飛驒人物事典】



一一

瀧井孝作碑

無限抱擁

瀧井孝作

碑面は、瀧井孝作直筆の『無限抱擁』の六朝風四文字が刻まれ、碑背に黒色花崗岩の説明板が嵌め込まれている。文学散歩道の文学碑第一号の碑である。昭和四十九年（一九七四）三月、現地を調査し直ちに着工した。碑背には、昭和四十九年十一月、高山市文化協会建設とあるが、実際の据え付けは、瀧井孝作の誕生日の四月四日に行い、昭和五十年（一九七五）瀧井孝作の来高を機に、碑の除幕式が行なわれた。

『無限抱擁』は、信一と松子という若い二人の、ひたむきで、はかない愛の物語である。心境小説として虚飾も感傷もない捨て身の作家態度と言われた。始めは『夢幻抱擁』と考えられたものを改めたという。創作態度を芭蕉の幻住庵の記に託し、「瞬間々に消滅する幻影に似たものをしっかり描き止め……」と語っている。

たきいこうさく

【瀧井孝作】 明治二十七年（一八九四）四月四日生、昭和五十九年（一九八四）十一月二十一日没

小説家・文化功労者。高山町空町（現大門町）生まれで東京都八王子市に居住。号は折柴。河東碧梧桐に師事し俳句の道に入った。大正八年（一九一九）時事新報記者になり、このころから芥川竜之介、志賀直哉らの知遇を得て文筆活動が旺盛となり『飛驒高山』などの短篇小説や随筆を次々に発表。昭和二年（一九二七）代表作『無限抱擁』発表。『野趣』で読売文学賞（昭和四十三（一九六八））。『俳人仲間』で日本文学大賞（昭和四十九（一九七四））。作品は「瀧井文学」と評され、トツトツとした中にも独特の味わいを持つ。昭和十年（一九三五）の芥川賞創設から五十六年（一九八二）まで選考委員を務めた。俳句を生涯の友とし『瀧井孝作全句集』などがある。高山の観光ポスターに用いる「飛驒高山」の文字など六朝風の書法でも知られる。

日本芸術院会員（昭和三十四（一九五九））。高山市名誉市民（昭和四十六（一九七二））。文化功労者（昭和四十九（一九七四））。勲二等瑞宝章（昭和五十（一九七五））。八王子市名誉市民（昭和五十（一九七五））。

【飛驒人物事典】

かわひがしへきごとう

【河東碧梧桐】 明治六年（一八七三）二月二十六日生、昭和十二年（一九三七）十二月一日没

俳人。松山市生まれ。名は秉五郎。

正岡子規に師事し俳句革新運動に加わる。明治三十六年（一九〇三）ごろから新傾向俳句へ進む。旧習打破、真実探求、個性拡充の時代の風潮に刺激され全国を風靡する。四十二年（一九〇九）七月、続三千里の旅の途中、信州松本から高山へ来て若き日の瀧井孝作と出会い、孝作は歓迎句会で認められる。四十五年（一九二二）にも再訪し高山の俳句界に影響を与える。四十四年（一九二二）俳誌『海紅』を創刊。著書『碧梧桐俳句集』『新俳句』。

【飛驒人物事典】

【志賀直哉】しがなおや

明治十六年（一八八三）二月二十日生、昭和四十六年（一九七二）十月三十一日没

小説家、宮城県石巻生れ。白樺派を代表する小説家。

代表作に『暗夜行路』『和解』『小僧の神様』『城の崎にて』等。著書唯一の長編小説である『暗夜行路』は、近代日本文学の代表作の一つに挙げられる。小林秀雄は、視覚的把握の正確さをよく受けとめ評価している。志賀直哉の後半生は、昭和二十四年（一九四九）、親交を深めていた谷崎潤一郎とともに文化勲章。交友関係では、学習院以来の武者小路実篤、細川護立、柳宗悦、らの他、梅原龍三郎、安部能成、広津和郎、谷川徹三ら、一流の文化人と交流があり、残された多くの日誌、書簡にみることができる。

一二

井上靖文学碑



人間が造った
古い歴史と文化の町を、
自然が造った
大山脈、小山脈が取り巻いている。
冬になると
山脈という山脈は雪に覆われ、
町は隅々まで、飛驒の貌を持ち、
優しい人情に鏤められる。
日本列島のほぼ中央に位置し、
フンザ・ギルギッドと並び
世界の山の町・高山。
登山家の背の美しく見える、
静かな山の町・高山。
井上靖

碑文は、原稿用紙に、直筆の碑のために書かれた詩である。平成二年（一九九〇）十月十日発行された生前の最後の詩集『星闌干』の最後に収録されている。（社）高山市文化協会の理事であった浅井通生氏が、沼津中学の同窓であったことから話が進んだ。風化しにくい石で、彫刻家の船越保武氏のデザインでという条件で金沢や天龍峡の碑を現地調査し、これを参考に建設した。

平成元年（一九八九）十月、建設予定地を視察された井上夫妻は、代表作『氷壁』の舞台、北アルプスを望む現地に大変喜ばれた。除幕は、井上靖と小鳥会長（当時副会長）が行い、碑の前で自身の詩を力強く朗読された。

いのうえやすし

【井上靖】 明治四十年（一九〇七）五月六日生、平成三年（一九二一）一月二九日没

小説家、詩人。文化功労者、文化勲章受章。北海道旭川町（現・旭川市）生まれ。

昭和五年（一九三〇）金沢市の第四高等学校理科卒。井上泰のペンネームで北陸四県の詩人が拠った誌雑誌『日本海詩人』に投稿、詩活動に入る。昭和七年（一九三二）九州帝国大学法文学部中退。京都帝国大学文学部哲学科へ入学、昭和十一年（一九三六）京都帝大卒業後、『サンデー毎日』の懸賞小説で入選（千葉亀雄賞）し、それが縁で毎日新聞大阪本社へ入社。学芸部に配属される。なお部下に山崎豊子がいた。

昭和二十五年（一九五〇）『闘牛』で第二十二回芥川賞を受章。昭和三十九年（一九六四）日本芸術院会員となる。昭和五十一年（一九七六）、文化勲章受章。昭和五十七年（一九八二）以降、世界平和アピール七人委員会の委員を務める。

一三

房成句碑



夕立や
晴れて
涼し
西の岸

房成

市内前原町地内、竹原家の墓地に「前原村藤右衛門房成」の句碑がある。藤右衛門は、「大原騒動」の代表者の一人で、江戸で斬首、高山で梟首（さらしくび・獄門）刑を受けた人である。碑は、江戸における辞世の句で、昭和五十六年（一九八二）、後裔の竹原広行氏他二名によって建立された。右隣には藤右衛門の墓がある。藤右衛門他六名の代表者は、七月二十一日、老中へ駕籠訴した。同時に勘定奉行松平対馬守の邸へ、駆込願をしたのが、前原村藤右衛門（房成）であった。

大原騒動の処刑者の何人かが、辞世の句を残しているが、それを建碑してあるのは、これ一つである。なお、八日町川上川に架かる、太平橋の先、左に建っているのは、房成句碑のレプリカである。

まえはらむらとううえもん
【前原村藤右衛門（房成）】
ふさなり

享保十八年（一七三三）生、安永二年（一七七三）十二月十八日没

義民。前原村の百姓。安永の大原騒動で駆込訴をしたため、江戸で獄門。首は江戸から送られ、桐生川原に晒す。

【飛騨人物事典】

一四

雀集館歌献燈



筑紫へに齡か堂不者と言葉の

北川直臣

〇〇にかがやくあり明の月

国府町村山地内、「村山天満宮」の境内にある。村山天満宮は古代住居趾が有ることでも知られている。石燈籠は、ほの暗い森の中の、参道の奥にひっそりと立っている。高山の私塾「雀集館」の門弟の奉献である。天保十三年（一八四二）師である北川直臣の筆。雀集館は、宝暦九年（一七五九）に始まり、明治五年（一八七二）の学校制度の時まで続いた。男女約七十名が、学んでいたと伝えられる。

きたがわようげん
【北川養元】

寛政三年（一七九一）生、嘉永三年（一八五〇）五月十一日没

医師。高山の人。名は直臣。字は温卿。号を双蘭。北川転経の子。

赤田臥牛の門で史書を修める。京都で奥劣斎に医学を学んで賀川流産科を研さんして帰郷し、父の医業を継ぐ。天保十一年（一八四〇）十一月、御役所御出入医師として買請米十五俵を受ける。和歌は田中大秀に学ぶ。

【飛驒人物事典】

一五

重胤歌献燈



国府町地内、小八賀川沿いに「剣緒（タテノオ）神社」があり、鳥居を過ぎて参道を進むと一対の石燈籠がある。右方には和歌を、左方には漢文で賛が、二面に刻まれている。文政十二年（一八二九）高山の素封家、上木重胤の奉献である。重胤の父重敏も、兄重郷も、文化人として著名であった。

森のともくび
宮居を照らす
見衣ぬ木陰れの
山あひに有とぞ

【上木重胤】うわきしげたね 明和三年（一七六六）五月十八日生、文政十三年（一八三〇）五月十九日没

俳人。高山の人。徳次郎・滄浪居と称する。江花重敏の二子で吐六の弟。高山一之町に分家。赤田臥牛に詩文を学ぶ。雲橋社中。従兄の三嶋正英の『新島追慕編』の序を書く。花里天満宮再興の碑を建てる。

【飛驒人物事典】

【雲橋社】うんきょうしゃ

加藤歩簫は幼より学を好み・六歳より父の塾にて学を修め長じて、五升庵蝶夢の門に俳諧を、伴蒿蹊の門に国学及び文章を学んだ。明和八年（一七七二）鷗社を創立して俳諧及び国学研究をなし、安永元年（一七七二）父隠居後は私塾を継承した。有名なる田中大秀・赤田臥牛の如きも、幼時薫陶を受けた。同二年（一七七三）鷗社を拡充して雲橋社を創立し、宗匠に推されて、其第一世に居り文芸による人格の浄化と家学の基本たる敬神尊皇の大義を鼓吹した。同四年（一七七五）雲橋社文庫を開設して衆庶の閲覧を計った。

【高山市史】

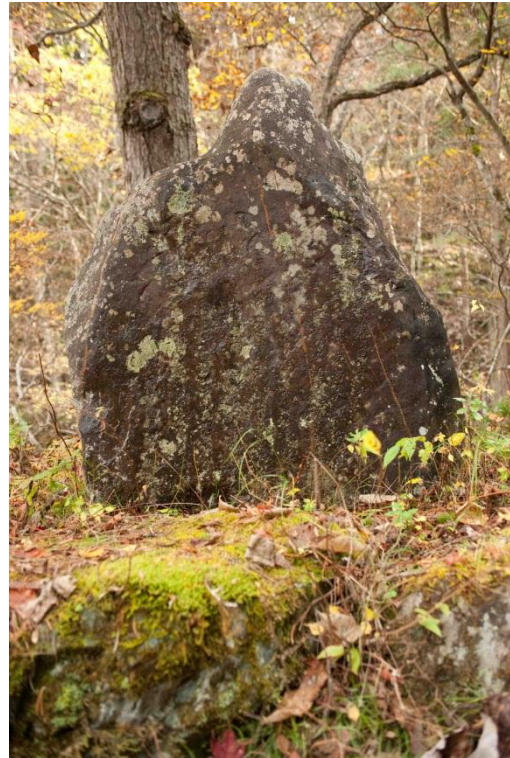
みしままさひで

【三島正英】 寛延二年（二七四九）一月五日生、天保三年（一八三二）十二月一日没

孝子。上木甚兵衛の二男。高山町に生まれ白川郷一色村の父の生家・三島家を継ぐ。初名を甚助。通称を勘左衛門。号は酔狂山人。

実父の甚兵衛が大原騒動で新島へ流罪となり、その病の報に接して、看護のため寛政三年（二七九二）に渡島。父の没後も一年間は島にとどまって喪に服す。同十二年（二七八〇）帰郷。著書、『天明水滸伝』『深山世婦子鳥』ほか。

【飛驒人物事典】



万葉集卷第十六

烏玉之斐太乃大黒毎見

巨勢小黒之所念可聞

うばたまの斐太の大黒見る毎に

巨勢の小黒しおもほゆるかも

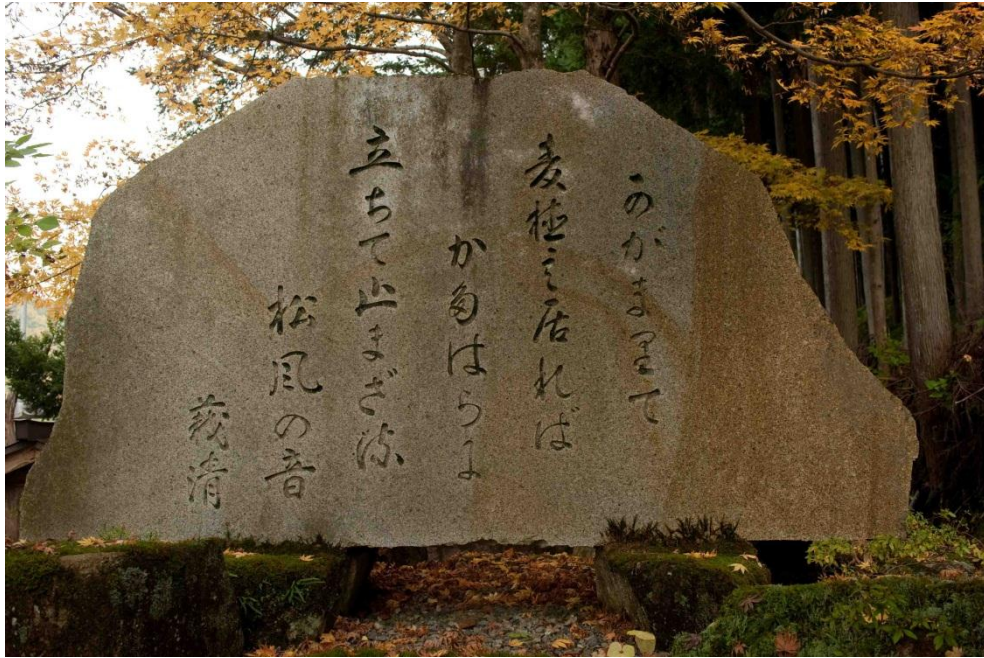
名馬大黒之碑

丹生川町呂瀬から「駒ヶ鼻峠」を越えて、上宝町本郷の集落に入る手前に「名馬大黒之碑」と、「万葉集卷第十六」に出ている「斐太乃大黒」の歌を刻んだ碑がある、富田豊彦の書で、その脇に「斐太乃大黒」について次の説明がある。

「『続日本紀卷二』に文武天皇太宝二年（七〇二）夏四月飛驒から神馬を献上し朝廷では瑞祥として大赦を行い郡の長の位を進め飛驒の百姓には三年の免税を賜り諸国の今年の田租と庸を半減したとありこの神馬が出た所と古くから言い伝えでこの地を駒が鼻と言いつの頃かこの大岩に『名馬大黒之碑』と刻む」

一七

小池義清歌碑



かがまりて
麦植え居れば
かたはらに
立ちて止まざる
松風の音
義清

上宝町本郷の本覚寺山門をくぐり、正面の一段高い場所にこの碑がある。

義清はアララギ会員として土屋文明に師事し、歌人として作歌励み克く後輩の指導を怠らず地域の文化の高揚に努力された。

義清亡き後氏の人徳を偲び、偉業を讃えて、昭和五十七年（一九八二）十月高原短歌会々員が歌碑を建立した。揮毫の葛谷鮎彦氏は、郷土史家として著名である。

こいけよしきよ

【小池義清】 明治三十七年（一九〇四）五月九日生、昭和五十五年（一九八〇）四月二十七日没

双六小屋経営者・上宝村議。同村吉野の人。斐太中学卒。

上宝村営双六小屋の経営を昭和二十五年（一九五〇）から引継ぎ、三十一年（一九五六）双六小屋に至る小池新道を開いた。四十年（一九六五）鏡平山荘を開設。昭和二十二（一九四七）～二十五年（一九五〇）と二十六（一九五二）～四十六年（一九七二）上宝村議を務めた。アララギ派の歌人で高原短歌会の創立者の一人。歌集『双六岳』。上宝村自治功労者（昭和四十二（一九六八））。勲六等单光旭日章（昭和五十五（一九八〇））

【飛驒人物事典】

くずたにみねぞう

【葛谷峯三】 明治三十七年（一九〇四）九月二十五日生、平成十年（一九九八）十二月二十三日没

郷土史家・俳人。神岡町の人。号は鮎彦。

昭和四十四年（一九六九）から『神岡町史』編纂の責任者。神岡町文化財審議会委員も務めた。飛驒運輸株が同社の三十周年記念に発行した『飛驒の街道』のうち、越中街道編をまとめた。文化財の保護と郷土史研究で神岡町表彰（昭和五十二（一九七七））

【飛驒人物事典】

篠原無然歌碑



若き日を山に果てなむ子等の無き
御代を祈りて山恋ひにけり

平湯温泉バス停から、国道一五八号「安房峠」の登り口の右側に「平湯民俗館」があり、道路添いにこの碑が建てられている。

昭和四十八年（一九七三）十月に篠原無然の五十回忌にあたり、篠原会が建てた。碑の右側面には『やわらぎのそののあるじ居住跡』と刻まれている。

篠原無然が作詞した「飛騨青年の叫び」の歌詞を刻んだ碑を、平湯民謡保存会が昭和五十五年（一九八〇）、平湯温泉バス停留所前の平湯温泉総合案内所脇に設置している。

作家、江夏美好氏は、篠原無然を「雪の碑（いしぶみ）」によつて作品化している。これが江夏美好氏の遺作となった。



飛驒青年の叫び

ああ偉なるかな飛驒の山
ああ美なるかな飛驒の溪
ああ清らかな飛驒の水

清泉溢れ湧くところ
気は朗らかに澄み渡り
靈智の光さゆるなり

飛驒山脈の打つところ
剛健の意気漲りて
正義の血しほ滾り湧く

げに限りなき天恵の
溢るる郷に生い育つ
飛驒青年の血は躍る

緑に炎ゆる森林の
滴るところ仁愛の
花芳しく薫るなり

飛驒山郷の任重し
飛驒青年の義は重し
飛驒樂園は夢ならず

【篠原無然】
しのはらむぜん

明治二十二年（一八九）三月七日生、昭和十三年（一九三八）十一月十四日没

社会教育の先覚者。兵庫県美方郡西浜村生まれ。名は禄次。ペンネームを嘉美高朗。

上宝村（現高山市）第一小学校の代用教員として、大正三年（一九一四）飛騨へ入る。同五年（一九一六）に平湯分教場へ転任。授業の傍ら戸主、青年、婦人を対象に歌を通じるなどして「飛騨人の心の美しさを持ち続け、高い理想を掲げて生き抜く」ことを指導。その姿勢が評価され飛騨各地の青年団や婦人会に招かれて指導に当たる。乗鞍岳の土俵ヶ原や桔梗ヶ原などは篠原の命名。東京からの帰途、雪の安房峠で遭難死。

【飛騨人物事典】

一九

若山牧水歌碑



のぼり来て
平湯峠ゆ見はるかす
ひだの平に
雲こぼりたり
牧水

沼津に住んでいた若山牧水は、三十七歳の明治三十七年（一九二二）九月、長野県白骨温泉で療養を始めた。快方に向かったのが飛騨山脈を越えて高山から古川・舟津を経て、富山經由沼津に帰っている。平湯温泉から高山へ向かうおり、平湯峠を登りつめて、パッと開けた西方の展望に感動した牧水の心が、この歌である。

昭和三十八年（一九六三）九月、平湯峠の頂上に「飛騨短歌会」が建設したが、道路拡張で倒されてしまったものを、旧上宝村が、平湯温泉の旅館「水石」の前に移した。昭和五十二年（一九七七）十一月中旬、関係者の間で話し合いが成立して、ほぼ当初の場所に近い現在の場所に戻された。

わかやまほくすい

【若山牧水】

明治十八年（一八八五）八月二十四日生、昭和三年（一九二八）九月十七日没

歌人。宮崎県出身。本名は繁。

早大予科へ入学直後に尾上柴舟門下となり、前田夕暮らと車前草社を結び、雑誌『新声』に作品を発表。歌誌『創作』主宰。大正十年（一九二一）九月に長野県から安房峠を越し高山へ来て、早大文学部での同級生の福田夕咲と再会し古川、舟津を経て帰る。

歌集『別離』『みなかみ』など。

【飛驒人物事典】

二〇 田中大秀歌碑



位山
かすみきらひて
朝日影
にほひそめたり
春たちぬとか
大秀

平成十四年(三〇〇三)春、一之宮町地内美術、文芸の愛好者で組織する「みやび会」が、「位山交流館」の完成を記念して、田中大秀の位山に縁のある歌を石碑に刻んで後世に残すこととした。

たなかおおひで

【田中大秀】

安永六年（一七七七）八月十五日生、弘化四年（一八四七）九月十六日没

国学者。高山下一之町の薬種商に生まれる。通称は弥兵衛・平之丞。号を紀文。後に大秀と改める。別に八月満・湯津香木園、晩年は荏野翁・荏野老人・三酉。自庭を千種園と呼ぶ。

幼より読書を好み栗田知周、伴蒿蹊らに学ぶ。享和一年（一八〇二）本居宣長の門に入り、没後は本居大平を訪ね国典を研究。飛騨に初めて国学を伝え、多くの門人を擁した。敬神勤皇の念篤く、文政一年（一八一八）に荏名神社、同四年（一八三三）に飛騨総社を再興。歌学、管弦も教授。

大正四年（一九一五）御即位の大典に当たり正五位。著書『竹取翁物語解』『養老美泉弁』『荏野冊子』『土佐日記解』他。

【飛騨人物事典】

高山市近代文学館調査・研究報告書

平成二十四年三月発行

編集 社団法人高山市文化協会